

# 伊勢国府跡 6

2004年3月

鈴鹿市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市教育委員会が2003（平成15）年度に実施した史伊勢国府跡ほか発掘調査等事業のうち伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）第18次調査の概要をまとめたものである。

2. 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体	鈴鹿市教育委員会（教育長 山下 健）	
調査指導	八賀 晋（三重大学 名誉教授）	
	大場範久（鈴鹿市文化財調査会 会長）	
	川越俊一（奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第二調査室 室長）	
	金田章裕（京都大学 副学長）	
	高瀬要一（奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡研究室 室長）	
	渡辺 寛（皇學館大学文学部国史学科 教授）	
	和田勝彦（四日市市立博物館 館長）	
	文化庁文化財部記念物課	
	三重県教育委員会生涯学習分野文化財保護チーム	
調査担当	鈴鹿市考古博物館	
組織及び構成	参事兼鈴鹿市考古博物館長	林 銀哉
	副参事兼埋蔵文化財グループリーダー	中森成行
	埋蔵文化財グループ指導主事	北条正則
	副主幹	藤原秀樹
	副主査	田中忠明
	事務吏員	伊藤 淳
	技術吏員（派遣）	水橋公恵
	嘱託	吉田真由美 林 和範

3. 調査を実施した箇所及び面積は以下のとおりである。（合計950m<sup>2</sup>）

Tab. 1 調査区一覧

次 数	地区記号	所 在 地	面積 m <sup>2</sup>
18-1次	6AJC-F	鈴鹿市広瀬町字矢下1126番	243.0m <sup>2</sup>
	6AJD-E	鈴鹿市広瀬町字矢下1144番	267.0m <sup>2</sup>
	6ALC-G	鈴鹿市西富田町字矢卸1015番15・16	48.0m <sup>2</sup>
	6ALE-A	鈴鹿市西富田町字矢卸1015番17	21.0m <sup>2</sup>
	6ALE-B	鈴鹿市西富田町字矢卸1015番17	11.0m <sup>2</sup>
18-2次	6AEA-A	鈴鹿市広瀬町字仲土居1283番2	360.0m <sup>2</sup>

4. 調査期間は2003年4月17日から2003年11月26日までである。

5. 現地調査は前記係員のうち藤原・水橋が担当した。

6. 本書の編集・執筆は水橋が担当した。

7. 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕麻生利一・小河清角・野口省三・水野豊・森明

〔屋内整理〕杉本恭子・別府智子・水谷由起子・坂下日向・永戸久美子

8. Plate. 1では国土地理院発行1:50,000四日市・亀山の一部を使用した。

9. 今回検出した遺構は以下のとおりである。

Tab. 2 遺構一覧

SD：溝	SK：土坑
254・255・256・257・258・260	259

10. 座標は過去の調査との整合性を保つため、国土座標第VI系を用いている。図中の方位は座標北を示す。

11. 調査区は必要に応じ、3mグリッドに分割し、北西のX・Y座標から下3桁を組み合わせてグリッド名とした。例) X=-124390・Y=45710の場合、390・710

12. 本調査にかかる遺物・図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

調査及び報告書刊行にあたっては上記指導委員の先生方の他に地権者ならびに地元各位をはじめ下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

泉 雄二・宇河雅之・大川勝宏・加藤真二・亀山 隆・木野本和之・駒田利治・鈴木克彦・吉水康夫・坂 文治・田中 衛・佐野義一・森 あい・坂 敏和・小田正八・辻 清男・広瀬町自治会・西富田町自治会・中富田町の山自治会・中富田町の町自治会

## 本文目次

I. 遺跡の位置と過去の調査	1
II. 18-1次調査	2
1 調査の経緯と経過	
2 調査成果	
3 まとめ	
III. 18-2次調査	3
1 調査の経緯と経過	
2 層序	
3 遺構と遺物	
4 まとめ	

## 表目次

Tab. 1 調査区一覧	例言
Tab. 2 遺構一覧	例言
Tab. 3 調査履歴	1
Tab. 4 報告書抄録	23

## 図版・写真図版目次

Plate 1 周辺の遺跡(1:100,000)	6
Plate 2 調査区位置図(1:5,000)	7
Plate 3 第18-1次調査区位置図(1:2,500)	8
Plate 4 第18-1次調査 6AJC-F・6AJD-E区平面図(1:200)	9
Plate 5 第18-1次調査 6ALE-A・6ALC-G・6ALE-B区平面図(1:200), 6ALE-A区土層図(1:80)	11
Plate 6 第18-2次調査区位置図(1:1,000)	12
Plate 7 第18-2次調査区平面図(1:120)	13
Plate 8 第18-2次調査 遺構平面図・土層図(1:40)	15
Plate 9 第18-2次調査 出土遺物実測図(1:4)	16
Plate 10 6AJC-F区全景/6AJD-E区全景/6ALE-A区全景/6ALE-B区全景/6ALC-G区全景	17
Plate 11 第18-2次全景/仲土居北地区南西隅	18
Plate 12 仲土居南地区北西隅/仲土居南地区北西隅	19
Plate 13 SK259・SD255土層/SK259・SD255	20
Plate 14 SK259・SD255検出状況/SD257・258/SD255/SD258西トレンチ	21
Plate 15 SD255中央トレンチ/SD255南トレンチ/SD257西トレンチ/SD257中央トレンチ /SD258中央トレンチ/SD258西トレンチ/出土瓦/出土瓦	22

# I. 遺跡の位置と過去の調査

鈴鹿市広瀬町・西富田町、亀山市能褒野町・田村町にまたがって広がる長者屋敷遺跡は、安楽川北岸の標高約50mの段丘上に立地する。当初、布目瓦の分布から南北約800m、東西約600mの範囲を埋蔵文化財の包蔵地として認定していたが、遺跡南方で行った昨年度の範囲確認調査により、遺構・遺物の分布がさらに広い範囲にわたることが判明している。現況は大半が畑地・水田である。

鈴鹿市教育委員会では、平成4年度から学術調査を続けており、平成7年度までに政庁全体の構造・規模がほぼ明らかとなった。また、平成8年度以降には、政庁周辺の調査を進め、政庁西隣で「西院」とも呼びうる区画を発見し、北方では区画内部に瓦葺礎石建物（北方官衙）が整然と建ち並ぶ方格地割の存在を確認している。この方格地割については、一つの区画が一辺約120mの略正方形で、区画の周囲に築地塀が巡らされていることなどが明らかになっている。ただし、方格地割がひろがる範囲については、未だ確定できていない（宇河1996・吉田2002）。

昨年度は政庁南方の状況を明らかにするべく計画調査を行うと共に、政庁南方の段丘上を横切る形で計画されている高規格道路の建設路線を検討するための基礎資料を得るために、緊急の範囲確認調査も行った。その結果、主に弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物を確認したが、政庁と同時代のものと考えられる遺構については、極めて希薄であることが判った（吉田2003）。

過去の調査から、遺跡全体にわたっての基本層序については、概ね次記のとおりと考えられるが、耕作などによってⅡ～Ⅳ層が削平されている場所も少なくはない。

- I層：表土・耕作土。
- Ⅱ層：クロボク土。
- Ⅲ層：漸移層。
- Ⅳ層：褐色砂質シルト層。
- V層：黄褐色砂質シルト層。
- Ⅵ層：砂礫混じり黄褐色砂質シルト層。

なお、周辺の歴史的環境については、既刊の概要報告に詳述されているので、そちらを参照されたい。

Tab. 3 調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所在地	面積	調査原因	概要
プレ1次	1957	A地点	広瀬町字南野		学術	礎石建物
		B地点	広瀬町字矢下			基壇
1次	1992	長塚1	広瀬町字長塚1247, 1248	110	学術	礎敷き遺構
		南野1	広瀬町字南野971	115		礎石建物
		荒子1	広瀬町字荒子981	110		瓦溜・溝
2次	1993	6 A H I - F、 6 A J A - A ほか	広瀬町字仲起1226・矢下1134ほか	238	学術	政庁後殿・東隅楼・軒廊 ・東内溝・東外溝・西外溝
3次	1994	6 A J A - J ほか	広瀬町字矢下1131～1133	750	学術	政庁正殿・西脇殿・西軒廊 ・西内溝・西外溝
3-2次	1994	県調査区	広瀬町字仲土居、亀山市能褒野町字仲土居	2700	県緊急	溝
4次	1995	6 A J A - A ほか	広瀬町字矢下・荒子・仲起	254	学術	政庁後殿・北外溝・西内溝・東隅楼
4-2次	1995	県調査区	広瀬町字仲土居、亀山市能褒野町字仲土居	1600	県緊急	溝
5次	1996		広瀬町字丸内	133	市緊急	竪穴住居・溝
6次	1996		広瀬町字矢下	288	市緊急	溝
7次	1996	6 A G E - A	広瀬町字南野972, 972-1, 972-2, 973	580	学術	掘立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997	6 A F B - A	広瀬町字長塚1279-2	632	学術	倒壊瓦・礎石建物・溝
9次	1997	A地区	広瀬町字矢下	21	市緊急	政庁南辺部
		B地区	広瀬町字矢下	26		政庁西脇殿
		C地区	広瀬町字仲起	5		溝
10次	1998	6 A F B - B	広瀬町字長塚1279-3, 1279-5	1014. 2	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999	6 A J A - H ほか	広瀬町字矢下1176ほか	863	学術	溝・礎石建物・南門
12次	2000	6 A H I - C F ほか	広瀬町字中起・荒子	1142. 8	学術	掘立柱建物・竪穴住居・溝
13次	2001	6 A H D - A B ほか	広瀬町字中起1237, 1240-1～3, 1241	714. 2	学術	溝・土坑
14次	2001	6 A E B - A B	広瀬町字仲土居1282-1	246	市緊急	礎石建物・溝
15次	2002	6 A J J - D ほか	広瀬町字矢下1154ほか	1184. 1	学術	溝・土坑・古墳・土壙墓
16次	2002	6 A J F - B ほか	広瀬町字矢下、西富田町字東起・矢卸	3463. 4	市緊急	溝・掘立柱建物・土器墓・古墳周溝・方形周溝墓
17次	2002	6 A D B - A B C D E		4640	市緊急	掘立柱建物・溝・竪穴住居
18次	2003	6 A J C - F	広瀬町字矢下1126	243	学術	溝
		6 A J D - E	広瀬町字矢下1144	267		
		6 A L E - A	西富田町字矢卸1015-17	21		
		6 A L E - B	西富田町字矢卸1015-17	11		
		6 A L C - G	西富田町字矢卸1015-15・16	48		
		6 A E A - A	広瀬町字仲土居1283-2	360		溝・土坑

## Ⅱ. 18—1次調査

### 1 調査の経緯と経過

昨年度の範囲確認調査では、政庁南側の平坦面に官衙群が広がる状況は想定できないことが明らかになった。また、都城の朱雀大路に類するような道路の存在を想定して、政庁南門の南約25～320mの間に4箇所設定した調査区でも道路遺構は確認されていない。このため、南門が東西方向の道路に面していたり、南門からの道路が南下してすぐ曲がっている可能性などを考慮し、今年度は可能な限り南門の近くに調査区を設定しようと試みた。

農作物や構造物などとの関係上、南門や政庁南辺に接する場所の調査はできなかったが、政庁南門の中心部分が想定されている茶畑の南の筆に6AJC-F区を、その南東の筆に6AJD-E区を設定し、調査を行った。

しかし、この両調査区においても古代の道路遺構は確認されなかった。そこで、圃場整備前に政庁付近から南へ一直線に延びていた農道が台地から低地へ降りる部分の谷状地形を、古代官道の建設による切り通しと考えられないかという指導委員会の指摘に基づき、谷頭に接する平坦面の2箇所(6ALE-A区・6ALC-G区)と、谷状地形の中段部分に1箇所(6ALE-B区)の調査区を追加設定することとした。

調査は、平成15年4月17日に開始し、同年6月30日に終了した。面積は合計590㎡。調査区の現況は、いずれも畑地である。

### 2 調査成果

#### 6AJC-F区

政庁南辺からおよそ20m程南に位置する。東西53.5m×南北12.5mほどの畑地に、53.5m×9.2mの規模で幅4mのトレンチを「L」字形に設定した。

遺構検出は、基本的に耕作土(厚さ6～25cm)直下の褐色砂質シルト層(前述のIV層)・黄褐色砂質シルト層(V層)で行ったが、調査区東側には部分的に漸移層(Ⅲ層)が残っており、中央付近では砂礫混じり黄褐色砂質シルト層(VI層)が帯状に検出された。

調査の結果、圃場整備前の農道側溝とみられる溝

(SD254)や、これに直交する方向の畑の畦や土取り穴などの攪乱が検出されたが、その他の遺構は全く認められなかった。

調査前には、調査区中央付近の南北方向の高まりを道路痕跡ではないかと期待もしていたが、薄い表土(約10cm)を除去すると、直下が砂礫混じり黄褐色砂質シルト層(VI層)となっており、人為的な高まりではなく、地山の硬度の違いが地形に現われたものと考えられた。

遺物には、瓦の小破片が16点程あり、大半が表土からの出土である。種類の判別可能なものはすべて平瓦で、凹面に布目、凸面に縄目が認められる。

#### 6AJD-E区

政庁南辺からおよそ40m程南に位置する。長辺55m×短辺18mの畑地に、4m幅で東西に52.0mのトレンチを設定し、このトレンチの東端と西端から南側へ、それぞれ16.5m×2.0m、13.0m×2.0mの南北トレンチを付加した。

遺構検出は、基本的に耕作土(厚さ20～45cm)直下の褐色砂質シルト層(IV層)・黄褐色砂質シルト層(V層)で行った。調査区西側には、部分的に漸移層(Ⅲ層)が残っていたが、調査区中央付近では、耕作が砂礫混じり黄褐色砂質シルト層(VI層)にまで達していた。

遺構・遺物ともに全く認められなかった。

#### 6ALE-A区

政庁南門からおよそ350m程南の段丘上平坦面に位置する。圃場整備前に政庁付近から南へ一直線に延びていた農道の西側に当たり、南側は谷状地形になっている。北側の道路に沿って、5.3m×2.0mの規模で東西方向の調査区を設定した。

調査の結果、現況の平坦な地形は近年の造成によるものと判明し、調査区西半で南西方向へ向かって落ち込む谷の谷頭、東半で谷状の落ち込みを検出した。また、調査区の東壁際では農道建設時の地盤改良に伴うとみられる土砂の堆積が確認された。

遺物は出土しなかった。

#### 6ALC-G区

6ALE-A区から道を挟んで東側に、長さ12.0m×幅2.0mの調査区を設定した。

耕作土（厚さ15cm程度）直下の黄褐色砂質シルト層（V層）上面で検出を行ったが、遺構は確認されなかった。

遺物としては、瓦片1点が出土したに過ぎない。

### 6 A L E - B 区

6 A L E - Aの南側で一段下がった場所に、幅1mのトレンチを東西方向に11mにわたって設定した。表土（厚さ7cm程度）直下の黄褐色砂質シルト層（V

層）上面で遺構検出を試みたが、遺構・遺物ともに全く認められなかった。

### 3 まとめ

政庁南門に取り付く道路を確認するための調査であったが、道路遺構のみならず古代の遺構は何ら検出されなかった。

## Ⅲ. 18-2次調査

### 1 調査の経緯と経過

政庁の北に展開する方格地割のうち、仲土居地区と呼んでいる南北2区画の区画間道路付近を対象に調査を行った。

政庁北方の方格地割の範囲については、当初想定案（宇河1996）よりも狭い南北2区画×東西4区画の規模である可能性が高いが、なお確定できていない現状にある（吉田2002）。現在、国史跡指定地は政庁と北方の南野地区・長塚地区に分かれている状況にあるが、将来的には追加指定を受けてこの3箇所を一体化したいと考えている。そこで、今後数年間は北方官衙の範囲を確定することに重点を置くこととし、今年度は方格地割西限の確認と併せて、区画や区画間道路の状況を把握することを目的に調査を実施した。

調査は、平成15年9月2日に開始し、同年11月26日に終了した。面積は360㎡で、調査区の現況は畑地である。

### 2 層序

現況地表面は、北西から南東へ向かって緩やかに低くなっており、調査区北西隅で標高51.1m、南東隅で標高50.5mである。基本的な層序は、上から耕作土（表土）・地山（黄褐色砂質シルト層・V層）となっており、表土の厚さは20～30cm程度である。遺構検出は地山上面で行った。

### 3 遺構と遺物

溝5条と土坑1基を検出した。遺物としては、瓦・ロクロ土師器がコンテナケースに1箱程出土した。

**SD255** 調査区西側で検出された南北溝。第14次調査（吉田2002）で確認されたSD130の延長線上にあ

り、同規模・同形であることから同一の溝と考えられる。重複関係からSK259よりも新しいことが判っている。3箇所にて設けたサブトレンチと、SK259と重複する付近についてのみ埋土を掘削した。平面形は、4～5m単位で僅かに蛇行しているが、巨視的にはほぼ一直線に伸びている。調査区北壁での断面規模は、検出幅0.55m、底面幅0.45m、深さ0.3mであり、南壁での規模は、検出幅0.45m、底面幅0.25m、深さ0.35mである。底面の高さは北壁で標高50.53m、南壁で標高50.25mであり、延長約28mで約28cmの落差がある。埋土は、基本的に下から①しまりの悪い黒色土、②地山ブロックを多く含む黒色土、③黒色土であり、その上に地山と黒色土が混じる締りの良い土が乗っている部分もある。

遺物は出土しなかった。

**SD256** 調査区の北壁際で、SD255の東側に検出された溝。調査区北壁に沿ってトレンチを入れ、検出部分西側の埋土を掘削した。調査区から更に北側へ延びているため、全容は不明だが、南端部での幅が約1.8mであるのに対して、北壁での検出幅は約2.6mとなり、やや広がる。深さは0.9mで、基本的な埋土は、下から①地山・褐色土・黒色土の混成土、②黒色土、③やや褐色がかかった黒色土である。

遺物としては、①と②の境付近で丸瓦の玉縁部（Plate 9-2）が、②と③の境付近からロクロ土師器片が出土した。

**SD257** 調査区南半で検出された東西溝。両端と中央の3箇所埋土の掘削を行った。規模は、幅0.8～1.2m、長さ32.5m、深さ0.2～0.5mである。幅・深さが一定していないため、一直線に並んだ連結土坑状の形を呈する。西端部分での埋土の状態は、下から①黒色土、②地山粒との混成土、③やや淡い黒

色土で、南側から流れ込んだ状況が観察された。

遺物としては、平瓦 (Plate 9-1) が出土した。  
**SD258** 調査区南壁付近で検出された平面L字形の溝。東西溝が西端で南へ屈曲し、調査区南壁から更に南へ延びる。南北溝は、第14次調査 (吉田2002) で確認されたSD129の延長線上にあり、同規模・同形であることから同一の溝と考えられる。東西溝に3箇所のトレンチを設定し、東のトレンチから東端にかけては北側のみを掘削した。規模は、幅1.0～2.9m、長さ東西32.1m、南北3.8m以上、深さ0.2～0.6mである。調査の性格上、部分的にしか遺構検出や埋土の掘削を行っていないため、東西溝の全容も不明確だが、幅・深さともに一定しておらず、SD257と同様に連結土坑状を呈する。東トレンチ部分では、埋土は上から①黒色土、②地山粒との混成土という2層から成っていることが観察され、②は北側から流れ込んでいるように見受けられた。

遺物は、平瓦と丸瓦が出土した。

**SK259** 調査区中央西側で検出された柱穴状の遺構。重複関係からSD255よりも古いことが判っている。平面形は、ややいびつな隅丸方形を呈し、底面中央に円形の柱痕がある。規模は、検出面では1.8×1.2m、底面では1.1×0.85m、検出面からの深さ0.6mである。柱痕は、直径0.2cmで、深さは柱掘方底面から約0.3mである。埋土は、地山粒を含む黒色土から成るが、柱痕部分の下層は、地山類似土である。

遺物は出土しなかった。

**SD260** SD257の東端から東へ24mのトレンチで検出された東西溝。トレンチ西壁から調査区外へ延びているが、西側へ8.5m程離れて設定したトレンチでは確認されていない。規模は、幅0.3m、調査区内で確認された長さ0.9m、深さ0.1mである。埋土は黒色土で、遺物は出土していない。近年の耕作に伴う溝かと考えられるが、SD257の延長線上にあるため、区画溝の可能性も残る。

### 3 まとめ

溝SD255～258はいずれも北方官衙と呼ばれている政庁北側の方格地割に関連する溝で、埋土の状態からSD255とSD256、SD255とSD258、SD257とSD258の間にはそれぞれ築地塀が作られていたと考えられる。SD255は仲土居地区の南北2区画の西端を一直線に

区切っているが、北側部分は北区画の西辺築地外溝、南側部分は南区画の西辺築地外溝を兼ねており、SD256は北区画の西辺築地内溝、SD257は南区画の北辺築地外溝、SD258は南地区の北辺・西辺築地内溝にあたる。

さて、これらの区画溝を概観してみて注目されるのは、溝が区画を全周していないことである。北区画では南辺築地塀の内溝・外溝ともに検出されず、南区画では北辺築地塀の内溝・外溝が両方とも同じ場所で途切れてしまい、その続きが検出されなかった。一方で、板塀など築地塀以外の遮蔽施設の痕跡も確認されていないし、後世の攪乱によりすべて滅失したような状況でもない。さらに、開墾前の現地を知る人の話では、この調査区を設定した場所にかつて胸の高さほどの土壁があり、調査で検出された溝から想定される築地塀の位置・あり方と一致していたという。

つまり、築地塀は、北地区の西辺、南地区の西辺および北辺の西側1/3ほどは戦前まで崩れながらも残っていたのであり、その後の開墾により地上部分は完全に滅失してしまっただが、その痕跡としての内溝と外溝が今回の調査により確認されたことになる。逆に言えば、今回溝が検出されなかった部分については、開墾前にも土の壁は存在しておらず、築地塀自体がもともと造られていなかったことも十分に考えられるわけである。

こうした築地塀のあり方は、未完成を強く印象づけるものだが、そもそも伊勢国府は政庁についても、基壇化粧の痕跡が認められないことから、工事が未完成であったと考えられており (藤原1995)、北方官衙の長塚地区でも、倒壊瓦の分析から、「建設されたのち大規模な屋根の補修を受けることのないまま倒壊に至ったものと推定され」(新田1999)、短命な国府であると認識されていた。今回の調査は、そうした「未完成の国府」の印象をさらに強める結果になったと言えよう。

また、当初の目的の一つであった南北2区画の間に想定されている道路については、北区画の南辺築地の側溝が外・内ともに検出されなかったため、幅を確定することはできなかった。

ところで、南区画の北西隅では、内溝SD258が直角に曲がる一条の溝であるのに対し、外溝SD257が

隅まで延びず約2.8mの間隙があいている。同様のあり方は政庁の北西隅でも認められ、政庁西外溝SD04は北限溝SD11に直接繋がらず、おおよそ3mほどの陸橋状の隙間があることが推定されている（新田1996）。いずれも、位置的に門などの存在は想定しづらく、間隔の距離がほぼ同じであるため、構造上の類似性を指定できるが、それがいかなる要因に基づくものであるかは明確ではない。〈註〉

政庁北方の方格地割の範囲については、第14次調査で仲土居南地区の西辺築地の外溝にあたるSD130よりも西側に遺構が確認されなかったことから、この溝を西限と考える案が出されており（吉田2002）、今回の調査でもSD130の延長にあたるSD255の西側で遺構は検出なかった。したがって、SD130・255のラインを方格地割の西限と考えてほぼ問題がない状況になってきた。

しかし、仲土居北区画では、これまで北辺・西辺・東辺で築地の側溝が確認されているにもかかわらず、今回南辺の築地側溝を検出することができなかったという調査結果を考慮すると、仲土居区画の西側に造りかけの区画があり、調査がたまたま造られていない箇所にあたっている可能性もなお捨てきれないと思われる。

最後に、このSD255と重複して検出された土坑SK259の性格について考えておきたい。SK259は遺物が1点も出土しなかったため時期を決めづらく、SD255と関係のある遺構とする直接的な証拠はない。しかし、周辺で他時期の遺構がまったく見つからないことや、溝の中軸線の直下に柱痕があるという位置関係からは、全く無関係であるとは考えにくい。埋土の状態から見て、SK259については、当初立てられていた直径20cm程の丸い柱が抜き取られて埋められた後、SD255が掘削されたという順序を想定できる。区画溝と関連するこのような土坑は、伊勢国府跡では今回がはじめての発見であり、今のところ斎宮跡や平城京・平安京など、規則的な区画のある遺跡の中にも類例を見出すことができない。したがって、どのような性格を持つのか軽々に断定できないが、方格地割の西限である可能性の高い区画溝の中心線の真下で、南北区画間のほぼ真中にあたることなどからすれば、方格地割を設定するときの基準のようなものではないかとの推測も可能である。

これまで、政庁北方の学術調査は建物を中心に進められてきたこともあり、各区画の隅部分や道路交差点の状況はあまり明らかになっていない。今後政庁北方での確認調査を行っていく上で、可能な範囲で方格地割設定基準遺構の検出されそうな場所を調査することも、十分に意義があるのではないだろうか。

〈註〉:政庁の北西隅については、SD04が基壇築成用の土砂採取を兼ねた溝と考えられているため、そのような性格に起因する可能性もある。

#### 〈参考文献〉

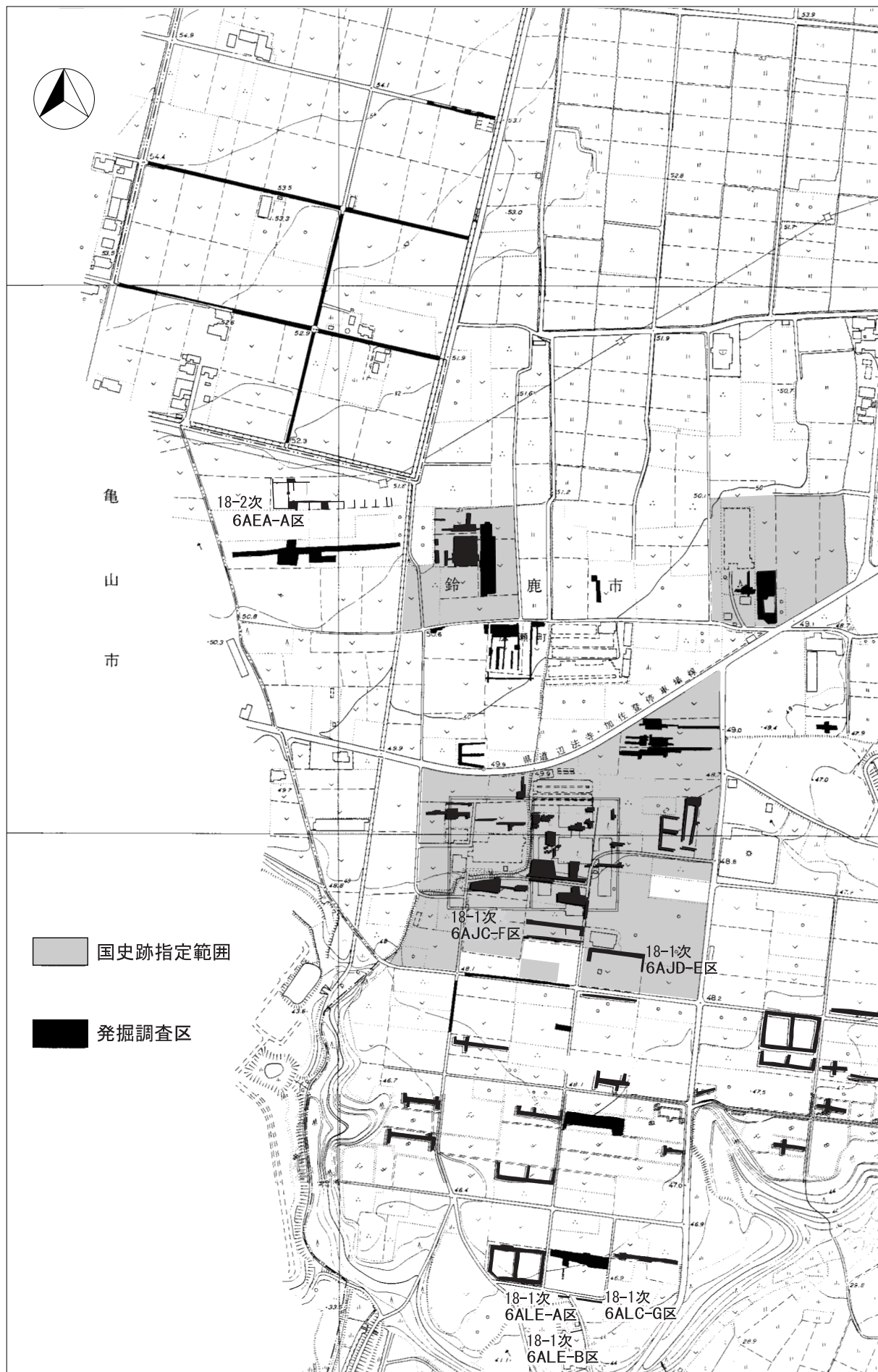
- 宇河雅之1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター  
藤原秀樹1995『伊勢国分寺・国府跡2』鈴鹿市教育委員会  
新田 剛1996『伊勢国分寺・国府跡3』鈴鹿市教育委員会  
新田 剛1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会  
吉田真由美2002『伊勢国府跡4』鈴鹿市教育委員会  
吉田真由美2003『伊勢国府跡5』鈴鹿市教育委員会





- 1. 伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡)
- 2. 観音沖遺跡
- 3. 推定鈴鹿関跡
- 4. 切山瓦窯跡
- 5. 古厩遺跡
- 6. 大鼻遺跡
- 7. 八野遺跡・八野瓦窯跡
- 8. 国府A遺跡
- 9. 三宅神社遺跡
- 10. 天王山西遺跡
- 11. 津賀平遺跡
- 12. 岡田遺跡
- 13. 川原井瓦窯跡
- 14. 山の原遺跡
- 15. 山辺瓦窯跡
- 16. 須賀遺跡
- 17. 天王遺跡
- 18. 伊勢国分寺跡 (推定僧寺跡)
- 19. 狐塚遺跡 (河曲郡衙跡)
- 20. 国分遺跡 (推定尼寺跡)
- 21. 木田坂上遺跡
- 22. 寺山遺跡

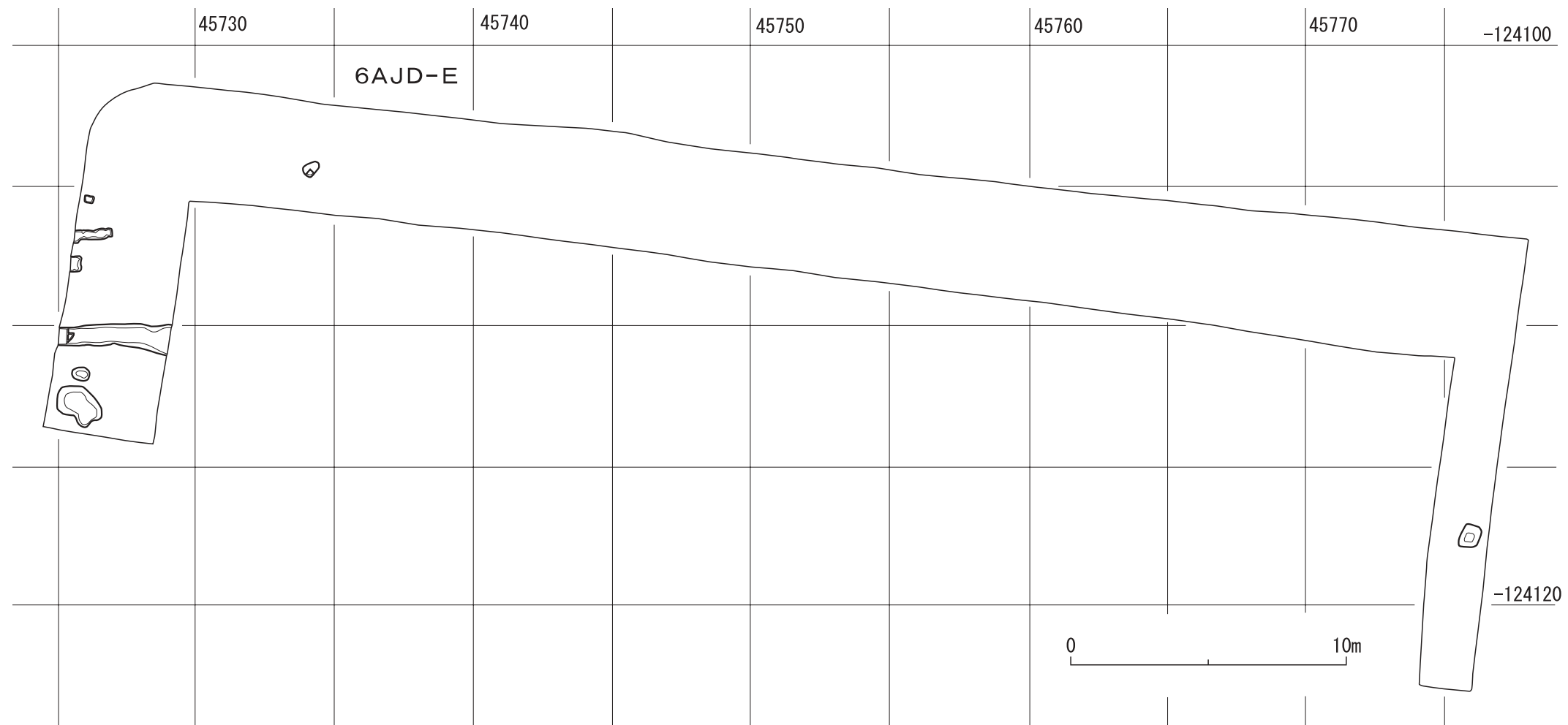
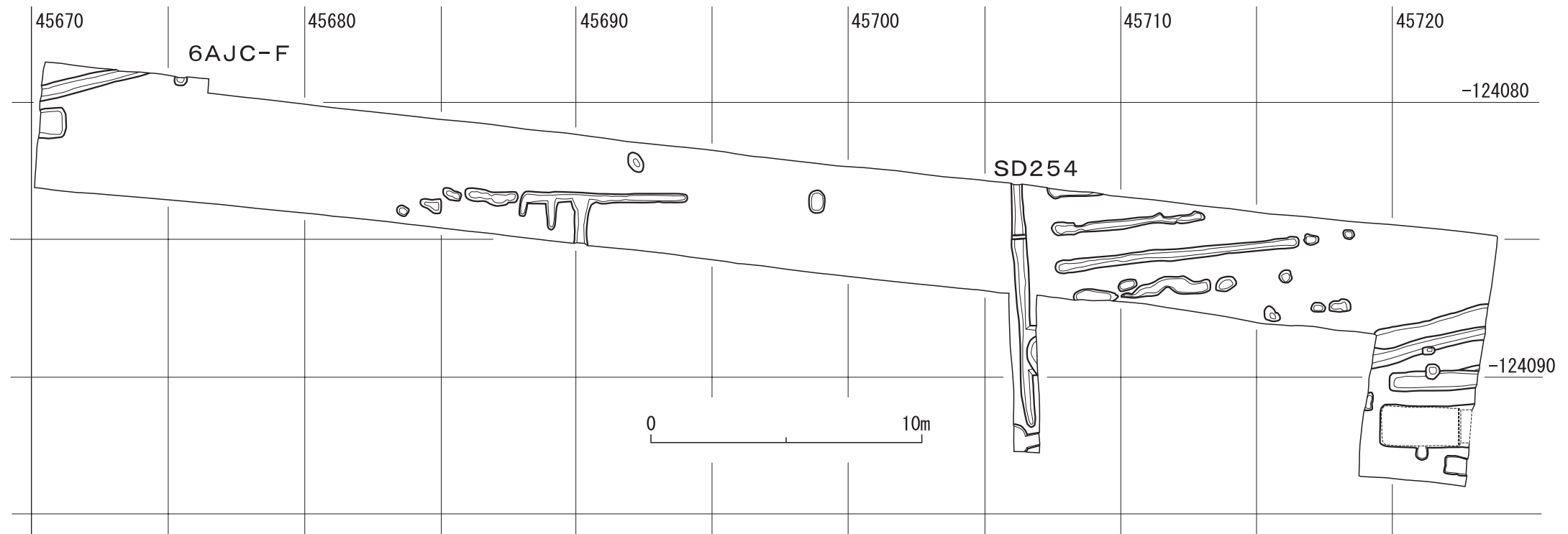
周辺の遺跡 (1:100,000)



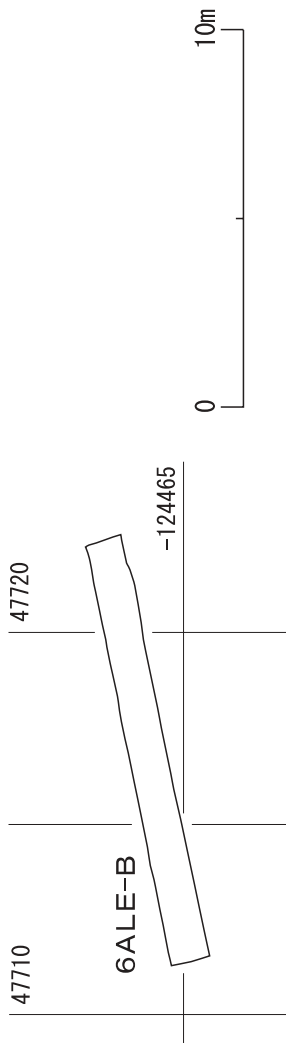
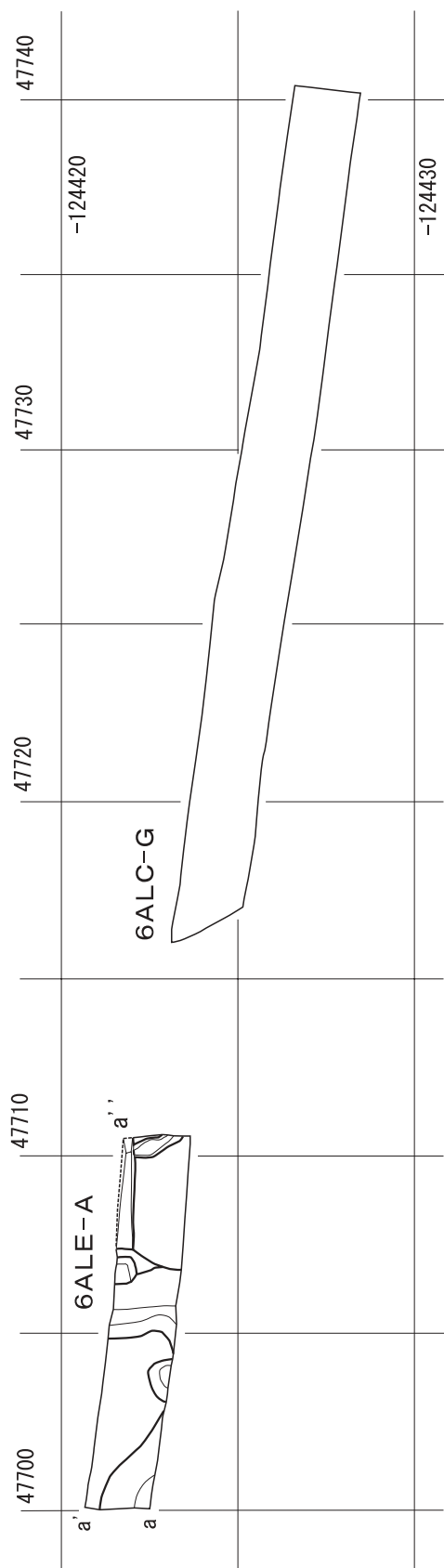
調査区位置図(1:5,000)



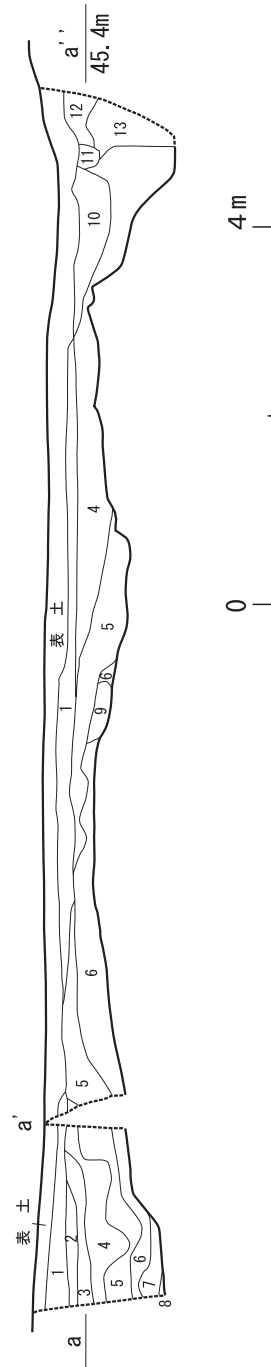
第18-1次調査区位置図 (1:2,500)



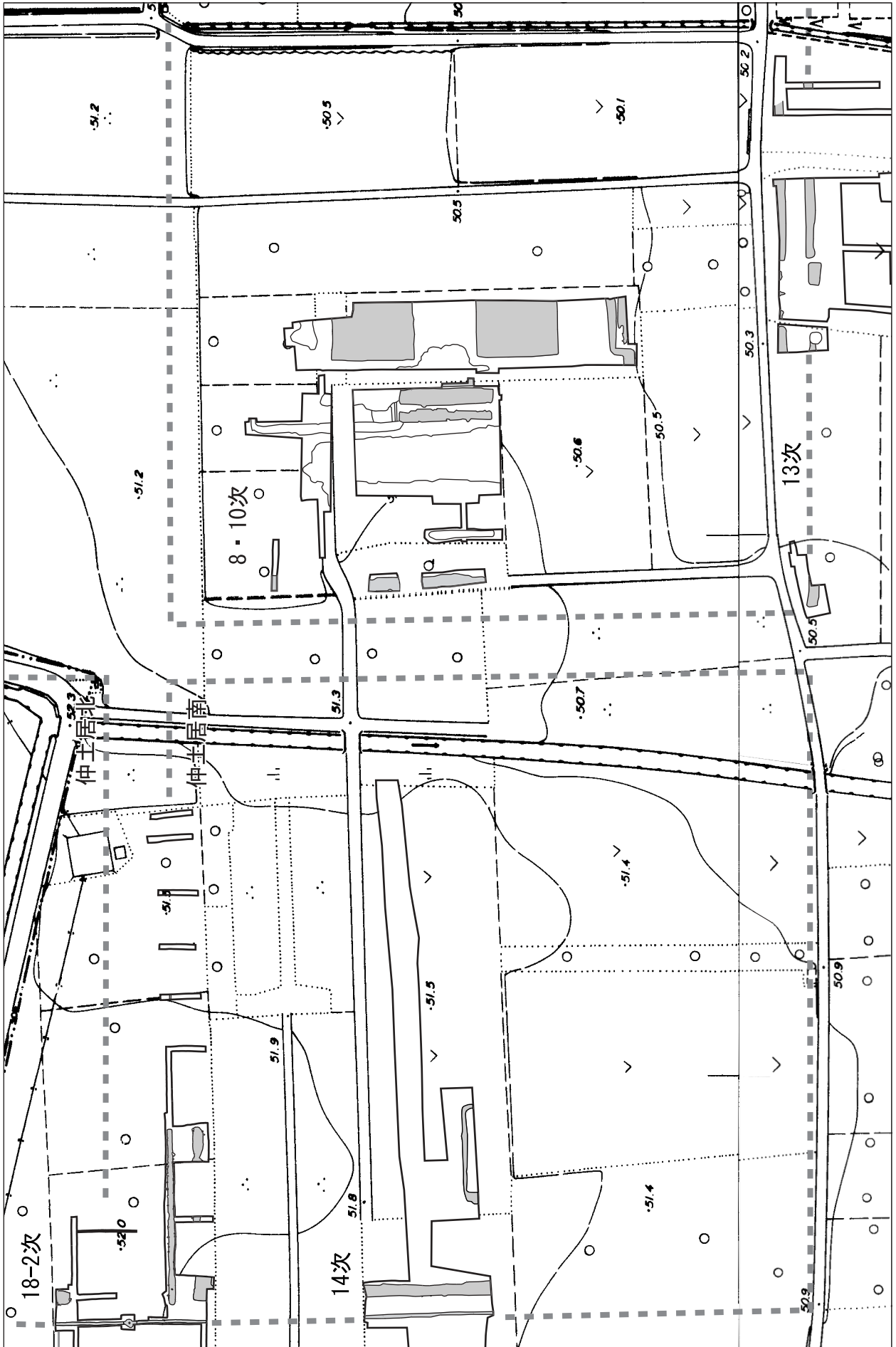
第18-1次調査 6AJC-F・6AJD-E区平面図(1:200)



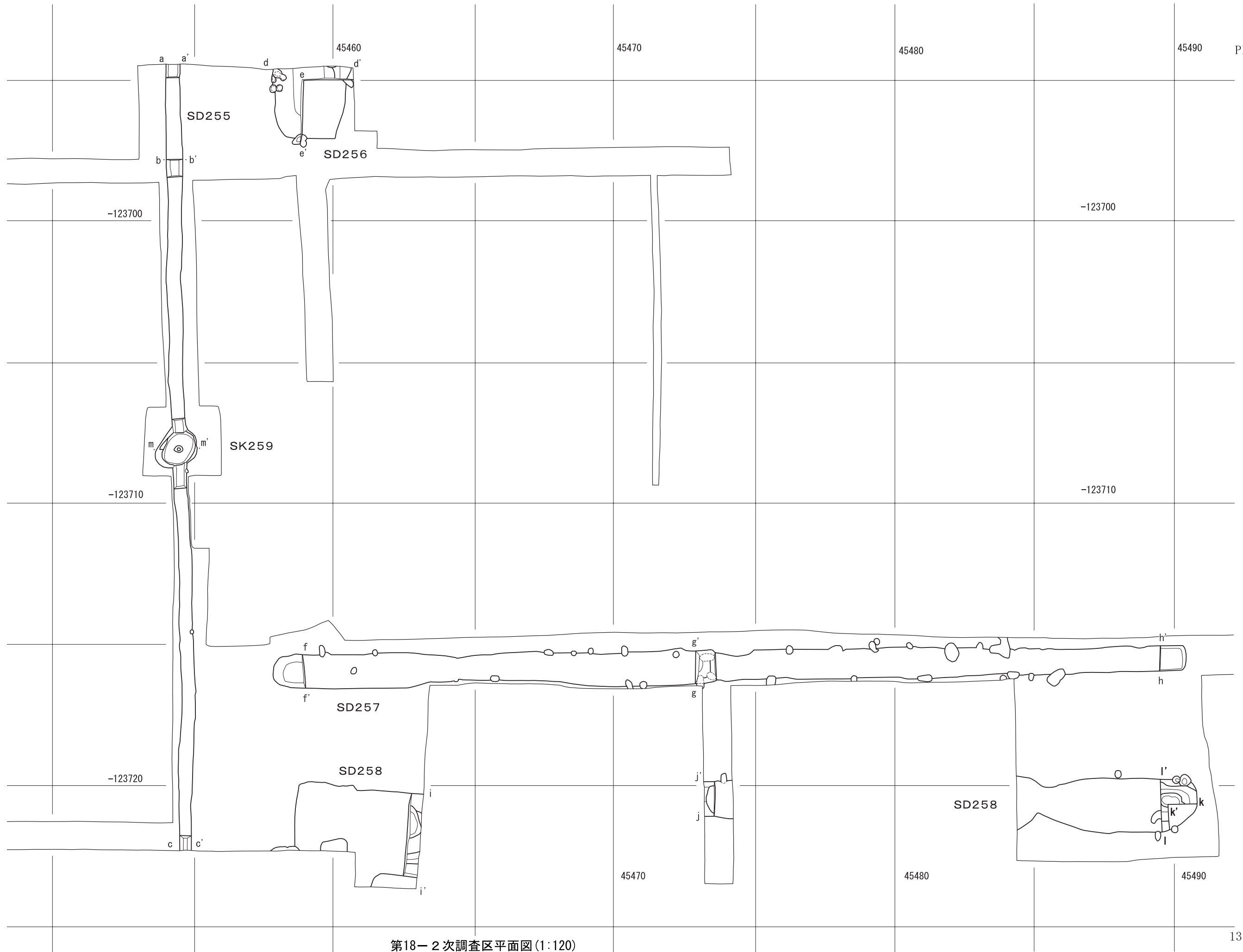
- 1 2.5Y4/6オリーブ褐 (1cm大の砂利多含)
- 2 2.5Y2/1黒
- 3 2.5Y3/1黒褐 (2.5Y6/6明黄褐の地山Brと黒色土の混成層)
- 4 2.5Y2/1黒 (3層より)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐 (3層より)
- 6 2.5Y2/1黒 (4層に類似)
- 7 2.5Y7/4浅黄 粘土
- 8 7.5YR4/4褐 粘土
- 9 2.5Y2/1黒 (しまり悪)
- 10 10YR8/6褐 (地山Br)
- 11 7.5YR4/3褐 (しまり悪)
- 12 7.5YR4/4褐 (しまり悪)
- 13 2.5Y6/3こぶい黄 砂利層 (しまり良。~10cm大の石・小石多含)



第18-1次調査 6ALE-A・6ALC-G・6ALE-B区平面図(1:200), 6ALE-A区土層図(1:80)

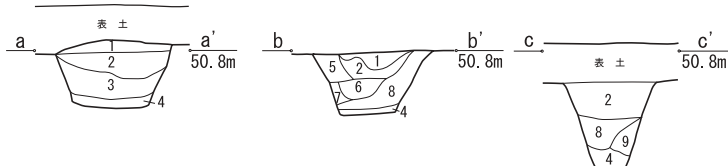


第18-2次調査区位置図(1:1,000) 破線は想定される築地外溝の位置



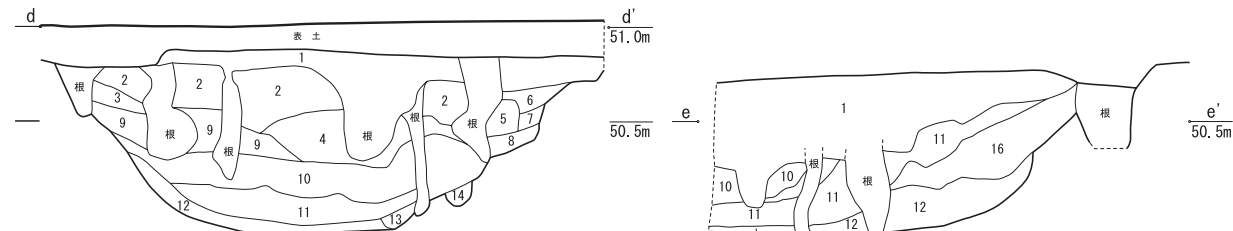
第18-2次調査区平面図(1:120)

SD255



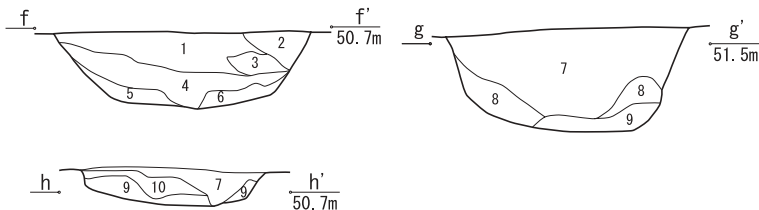
- 1 10YR1.7/1 黒+10YR6/6橙の混成層
- 2 N1.5/0黒
- 3 10YR3/2黒褐 (地山粒混)
- 4 N1.5/0黒 (しまり悪い)
- 5 10YR1.7/1黒
- 6 10YR2/1黒 (地山粒少混)
- 7 10YR6/6橙 (地山Br)
- 8 10YR4/3にぶい黄橙 (地山粒多混)
- 9 10YR2/1黒 (~5cmの地山Br混)

SD256



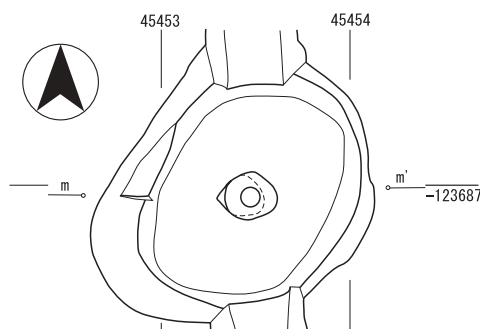
- 1 10YR2/0黒
- 2 10YR4/4褐 (地山粒混)
- 3 N1.5/0黒
- 4 N1.5/0黒
- 5 10YR5/4にぶい黄橙 (地山粒多混)
- 6 N1.5/0黒
- 7 10YR5/4にぶい黄橙 (地山粒多混)
- 8 N1.5/0黒
- 9 10YR2/2黒褐
- 10 10YR1.7/1 黒
- 11 10YR1.7/1 黒+10YR3/3暗褐+地山Brの混成層
- 12 10YR1.7/1 黒
- 13 N2/0黒+地山Br (やや灰色)
- 14 N2/0黒
- 15 N2/0黒

SD257

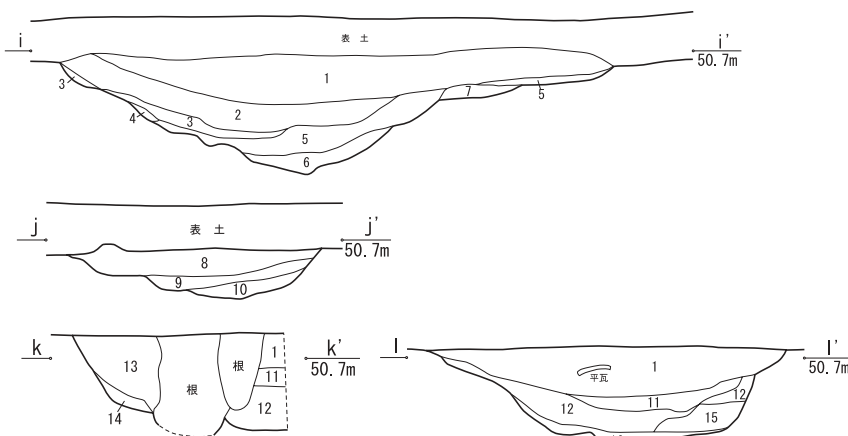


- 1 10YR2/1黒
- 2 10YR4/3にぶい黄橙 (~5cmの地山粒多混)
- 3 N1.5/0黒
- 4 10YR2/1黒
- 5 10YR5/6黄褐 (地山粒)
- 6 10YR4/3にぶい黄橙 (地山粒多混)
- 7 N1.5/0黒
- 8 10YR4/3にぶい黄橙 (6に似る)
- 9 N1.5/0黒
- 10 10YR2/2黒褐 (地山粒との混成層)

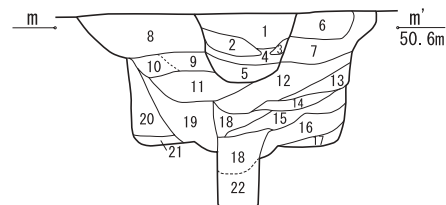
SD255・SK259



SD258



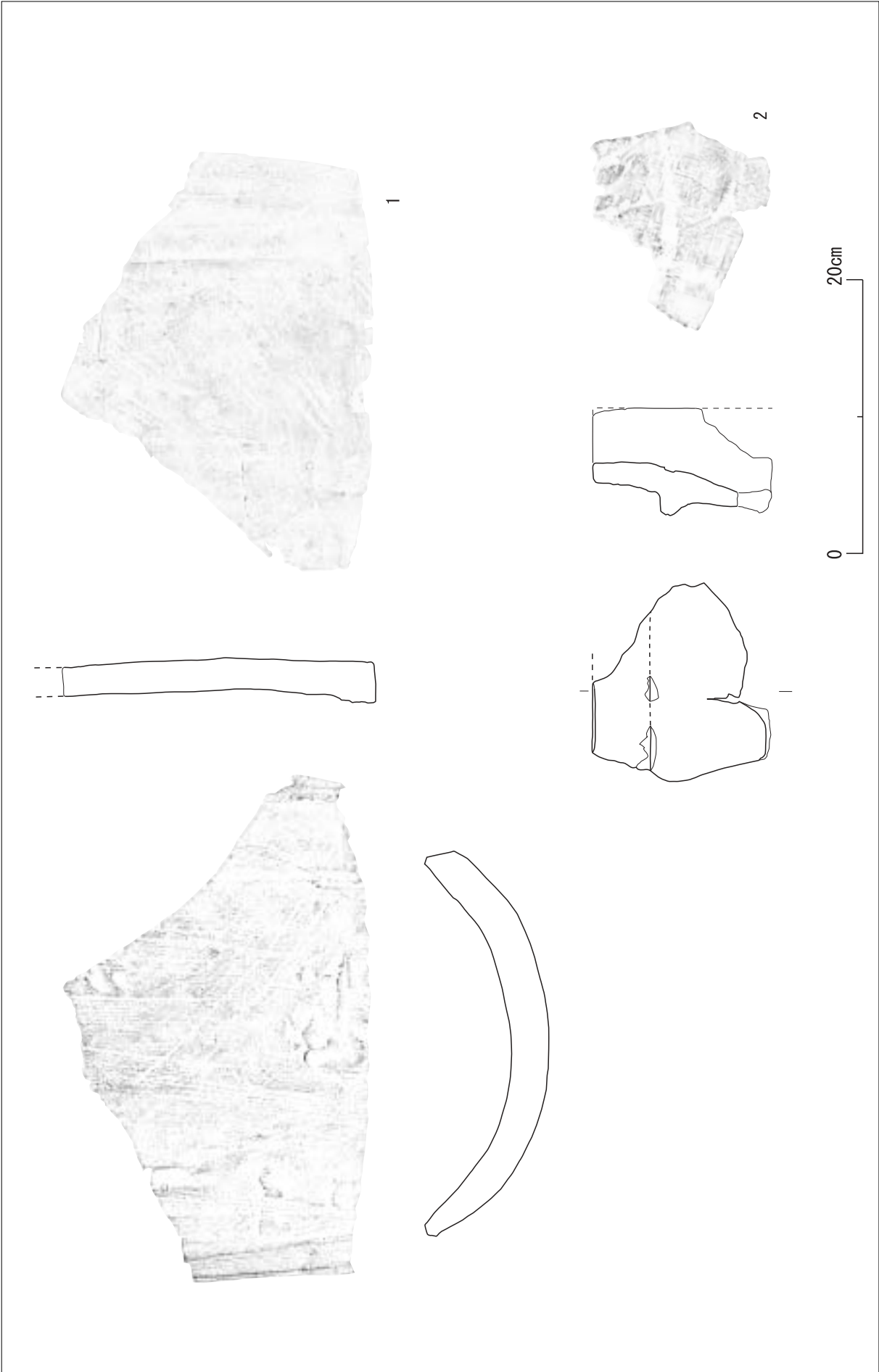
- 1 N1.5/0黒
- 2 10YR2/2黒褐
- 3 10YR1.7/1 黒
- 4 N1.5/0黒
- 5 10YR4/3にぶい黄橙 (黒色土と地山土が交互に重なる。しまり悪い)
- 6 10YR4/3にぶい黄橙 (5よりやや黒い)
- 7 10YR5/4にぶい黄橙 (地山類似土)
- 8 N1.5/0黒 (地山粒少混)
- 9 N1.5/0黒 (地山粒ほとんど含まない。やや粘性あり)
- 10 N1.5/0黒 (地山粒少量混)
- 11 10YR3/2黒褐 (地山粒多混)
- 12 N1.5/0黒
- 13 N1.5/0黒
- 14 10YR3/2黒褐 (地山粒混)
- 15 10YR2/2黒褐 (地山粒混)
- 16 N1.5/0黒



- SD255
- 1 N1.5/0黒 (地山粒層あり)
  - 2 10YR1.7/1 黒 (底に~2cmの地山粒層)
  - 3 10YR1.7/1 黒 (底に~2cmの地山粒層)
  - 4 N1.5/0黒 (地山細粒層あり。やや粘性あり)
  - 5 10YR1.7/1 黒 (~4cmの地山Br多混)
- SK259
- 6 10YR1.7/1 黒
  - 7 10YR2/1 黒
  - 8 10YR1.7/1 黒 (底に~1cmの地山粒)
  - 9 10YR1.7/1 黒
  - 10 10YR2/1 黒
  - 11 10YR3/2黒褐
  - 12 10YR3/2黒褐 (7に似る。)
  - 13 10YR3/2黒褐 (地山細粒混)
  - 14 10YR2/1 黒 (地山細粒混)
  - 15 10YR3/4黒褐 (地山Br有)
  - 16 10YR3/4黒褐 (地山Br無)
  - 17 10YR3/4黒褐
  - 18 10YR3/2黒褐 (しまりなし。黒色粒混)
  - 19 10YR3/2黒褐
  - 20 10YR3/2黒褐 (大きな地山Br多混)
  - 21 10YR3/2黒褐
  - 22 10YR5/4にぶい黄橙 (周囲に10YR3/1黒褐のスジが入る)

第18-2次調査 遺構平面図・土層図(1:40)





第18-2次調査 出土遺物実測図(1:4)



6AJC-F区全景(東から)



6AJD-E区全景(西から)



6ALE-A区全景(東から)



6ALE-B区全景(東から)



6ALC-G区全景(東から)



第18-2次全景(南西から)



仲土居北地区南西隅(北から)



仲土居南地区北西隅(西から)



仲土居南地区北西隅(南東から)



SK259・SD255土層(南から)



SK259・SD255(南から)



SK259・SD255検出状況(北から)



SD255(北から)



SD257・258(西から)



SD258西トレンチ(南西から)



SD255中央トレンチ(南から)



SD255南トレンチ(北から)



SD257西トレンチ(西から)



SD257中央トレンチ(北から)



SD258中央トレンチ(東から)



SD258西トレンチ(北東から)



平瓦(1)凹面



平瓦(1)凸面

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	いせこくふあと6							
書名	伊勢国府跡6							
編著者名	みずはしきみえ 水橋公恵							
編集機関	鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL0593(74)1994							
発行年月日	2004年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	(政庁)				
ちょうじゃやしき 長者屋敷	すずかしひろせ 鈴鹿市広瀬町 にしとみだ ・西富田町	24207	306	34° 52′ 52″	136° 00′ 00″	2003年 4月17日 ) 2003年 11月26日	950m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長者屋敷 (18-1次)		なし	なし	瓦片		政庁以南の調査		
長者屋敷 (18-2次)	官衙	奈良・平安	溝・土坑	平瓦・丸瓦・土師器		方格地割の範囲確認調査		



---

# 伊 勢 国 府 跡 6

---

発 行 日 2 0 0 4 年 3 月 3 1 日  
編 集 ・ 発 行 鈴 鹿 市 教 育 委 員 会  
鈴 鹿 市 考 古 博 物 館  
〒 5 1 3 - 0 0 1 3  
三 重 県 鈴 鹿 市 国 分 町 2 2 4 番 地  
TEL 0 5 9 3 ( 7 4 ) 1 9 9 4  
FAX 0 5 9 3 ( 7 4 ) 0 9 8 6  
E-mail : kokohakubutsukan  
@city.suzuka.mie.jp  
URL : [http://www.edu.city.suzuka.  
mie.jp/museum/](http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/)

印 刷 早 川 印 刷 株 式 有 限 公 司

---

# Ise Kokuhu Site

Preliminary Report No.6

March, 2004

Suzuka city Board of Education Mie Pref., Japan